不空訳「仁王護國般若波羅蜜多經」小考

友永植

はじめに

筆者は先に法隆寺所蔵の不空三藏訳「仁王護國般若波羅蜜多經」（以下「仁王經」と略す）の写経に関する覚書の一部をまとめたが、[1] 本稿はこれの続編である。先の小考では写経そのものについて論じたが、本稿では不空の当経翻訳の周辺、特にその政治史上の意味合について考えてみたい。

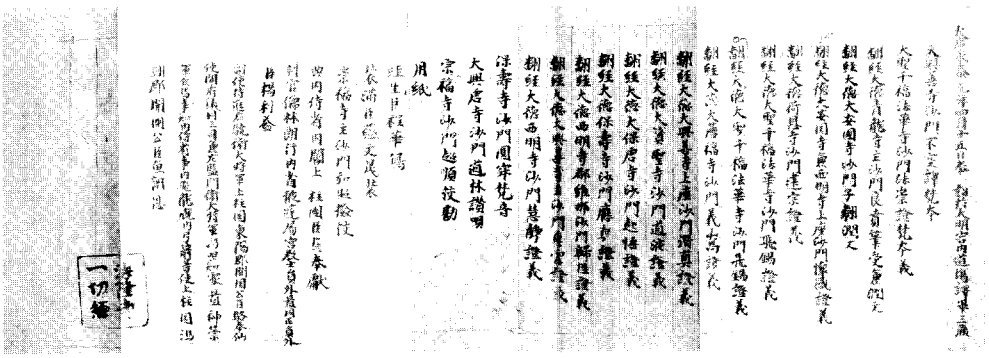
周知の如く、不空金剛は唐代に中国密教を大成した北インドのバラモン出身の僧侶で、鳩摩羅什・眞諦・玄奘と並び称される訳経家である。一方また、玄宗・肅宗・代宗三代の灌頂国師として朝廷の厚い信頼を受け、僧籍に在りながら生前に特進試鴻臚卿、開府儀同三司・肅國公などの官爵を授けられ、死後、司空を贈られるなど現世権力と強く結びついた人物でもあった。[2] 不空が国家権力に急速に接近していったのは安史の乱を契機としてであった。それは密教の持つ加持祈禱の呪術性が、時勢がら朝廷に歓迎されたからであり、また実際、彼の呪願・祈禱の力は凄まじいものがあったという。[3]

さて、西明寺沙門、円照の撰した『貞元新定釋教目録』（巻十五、總集群經録上之十五、〈『大正新脩大藏經』目録部所収〉）は、不空の「仁王經」翻訳の経緯を次の如く記している。

> 再譯仁王護國般若波羅蜜多經二巻。右一部二巻、大興善寺三藏沙門不空所奏、此當第四譯也。此經、自晉至唐、凡有四譯、……三藏和上詳覧晉經、校於梵本。文義脱略、華夷語乖。録表上聞、再請翻譯。此卽第四譯也。制曰、仁王經、望依梵甲、再譯梵文。……時也、永泰元年四月二日。恩旨頒下、令譯斯經。

これによると、代宗の永泰元年（七六五年）四月に、旧訳の不備を理由に不空が再訳を奏請し、代宗がこれを許して翻訳を命じたという。永泰元年は史朝義が平州に自決し、安史の乱が終息した宝応二年（七六三年）の翌々年であり、不空が積極的に朝廷工作を展開していた時期に当たる。[4] 「仁王經」が鎮護国家の経典であることを考えれば、当経翻訳の請願もその一環をなすものと理解してよかろう。

不空の朝廷工作は常に時局を的確に摑むことによって成功してきたといえる。[5] この度の請願が代宗の許すところとなったのも、それが時宜を得ていたからに他ならない。小論の目的は、朝廷が不空の請願を入れ、訳経を命じた背景を探ることにある。従来、当訳経に関してはその事実関係が指摘されるばかりで、訳経と当時の政治情勢との関わりについて論じられることはなかった。[6] 小論においてはこの点を、特に訳経に携わった人物に着目しながら、検討して行きたい。



法隆寺藏「仁王護國般若波羅蜜多經」巻末の訳場列位

一　「仁王經」訳経関係者

訳場列位

一九九一年五月、大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館が開館十周年紀念事業として「法隆寺展」を催したが、この折に不空訳「仁王護國般若波羅蜜多經」の写経が公開された。当写経は「法隆寺一切経」に含まれるもので、平安末期に書写されたという。この写経の興味深いのは、その巻末に訳場列位が付されており、訳経に携わった関係者を一覧できることである。上に掲げてある写真がそれである。[7] この訳場列位は『大正新脩大藏經』所収（般若部四）の「仁王護國般若波羅蜜多經」には付されてないが、ほぼ同様の記載が目録部所収『貞元新定釋教目録』第十五の不空翻経の項に見える。下の表1は写経の訳場列位と『貞元新定釋教目録』の記事を対校させ整理したものである。[8]

表１　「仁王經」訳経関係者

No.	関係者	肩　書・官　職	訳経職務
1	不空	大興善寺沙門	訳梵本
2	法崇	大聖千福法華寺沙門	證梵本義
3	良賁	翻経大德青龍寺主沙門	筆受兼潤文
4	子隣	翻経大德大安国寺沙門	潤文
5	懐感	翻経大德大安国寺兼西明寺上座沙門	證義
6	建崇	翻経大德荷恩寺沙門	證義
7	飛錫	翻経大德大聖千福法華寺沙門	證義
8	義崇	翻経大德大薦福寺沙門	證義
9	潛眞	翻経大德大興善寺上座沙門	證義
10	道液	翻経大德大資聖寺沙門	證義
11	趙悟	翻経大德大興唐寺沙門	證義
12	應眞	翻経大德大保壽寺沙門	證義
13	歸性	翻経大德西明寺都維那沙門	證義
14	慧靈	翻経大德大興善寺主沙門	證義
15	慧靜	翻経大德西明寺沙門	證義
16	圓寂	保壽寺沙門	梵音
17	道林	大興唐寺沙門	讃唄
18	超順	宗福寺沙門	校勘
19	程華	経生	寫
20	蘊文晟	装満	装
21	弘照	崇福寺主沙門	検校
22	馬奉獻	内侍省内闈上柱国	典
23	楊利益	儒林郎行内省掖庭局宮教博士員外置同正員外	判官
24	駱奉仙	特進右驍衛大将軍上柱國東陽郡開國公	副使
25	魚朝恩	開府儀同三司兼左監門衛大将軍仍兼知處置神策軍兵馬事知内侍省事内飛龍厩内弓箭等使上柱國馮翊郡開國公	使

訳経人事の特色

表1によると、当訳経は翻訳実務に従事する僧侶組織（1～21）と事業を統轄する官僚組織（22～25）とによって運営された如くである

が、先ず以って関心を引かれるのが、その統轄組織が代宗朝の権臣魚朝恩を始めとする内官によって構成されている点である。[9] 訳経は国家事業として行われるのが一般であり、[10] 訳経に当たっては何らかの肩書で官僚が参与し、これを取り仕切ったが、内官の参与は何分にも異色の感が強い。そこで、唐朝の過去の訳経事業に照らし、この内官参与の問題を検討してみよう。次頁の表2は『貞元新定釈教目録』也の史料から、[11] 永泰元年以前の訳経事業で官僚の参与が認められるものを抽出し整理したものである。

これによれば、訳経に携わった官僚の殆どが文官で、氏名が確認できるもの三十八名の内、十八名(約四七%)が職事官[12]三品以上、三十三名(約八六%)が五品以上であり、統轄職と見られる「監護」・「監譯」に関しては、就任者十二名の内、八名(約六六%)が三品以上、十名が五品以上(約八三%)であることがわかる。つまり、不空以前の訳経に関しては、高級文臣官僚の参与が一般的であった如くである。[13]

嘗って、高宗が太子弘(中宗)のために大慈恩寺で大齋を催した折、黄門侍郎薛元超と中書侍郎李義府が訳経事業を輝かしめる徳について玄奘に尋ねたところ、玄奘は「訳經、位は僧に在ると雖も、光價は終に朝貴に憑る」と答えて、前朝の事例を挙げるとともに、貞觀初の波羅頗迦羅蜜多羅の訳経に当って、太宗が左僕射房玄齢・趙郡王李孝恭・太子詹事杜正倫・太府卿蕭瑀に命じ、これを監閲せしめた事実を指摘し、大慈恩寺の訳経にも同様に朝廷貴臣の参与を要請したという。[14] 訳経事業への官僚の参与は、それが高級官僚にして始めて意味を持ったわけである。

二　訳経統轄者

唐朝における前例からして、訳経事業への内官の参与はやはり異例であったということが判った。では、何故に今回に限り魚朝恩以下の内官が起用されたのであろうか、次に検討してみたい。

訳場の問題

内官と今回の訳経を結び付ける因子としては、先ず訳場の問題が指摘できよう。すなわち、前掲写経の訳場列位の始めに、「大唐永泰元年四月十五日、奉詔、於大明宮内道場譯畢、三蔵」とあって、今回の訳経は大明宮の内道場で行われたことが知られる。[15] この内道場とは内廷に設けられた宗教法会の道場で、皇室の私的仏堂・道観的施設であり、唐代では武后朝以降盛んにここで仏事が催されたという。[16] また、大明宮は長安宮城の東北に連なる宮苑で、高宗以降宮城の低湿なるを嫌って、ここに居を移した。[17] 訳経がこの大明宮で行われたということになると、内官が事業の統轄を命じられたとしても異とするに足るまい。

ただ、前掲表2を見ると、武后朝から睿宗朝にかけての實叉難陀や義淨の訳経は、東都大内大遍空寺・東都内道場・大内佛光寺など、大内(内廷)の施設で行われているにもかかわらず、いずれも文官がこれに参与している。このことからすれば、今回の訳場の問題が内官参与の決定要因であったとは断じ得まい。

不空と魚朝恩の関係

次に考えられる因子は、内官、就中統轄責任者である魚朝恩と訳主不空との個人的関係である。この点については、夙に山崎宏氏の研究があり、[18] 不空が魚朝恩他の内・外廷に実権を振るった内官の巨頭と関係を結び、それを絆に朝廷の絶大な信頼を獲得したことを指摘している。『舊唐書』巻一八四、魚朝恩伝に、

> 廣德元年、西蕃入犯京畿、代宗幸陝。時禁軍不集、徵召離散。比至華陰、朝恩大軍遽至迎奉。六師方振、繇是深加寵異。改爲天下觀軍容宣慰處置使。時四方未寧、萬務事殷、上方注意勲臣。朝恩專典神策軍、出入禁中、賞賜無算。朝恩本凡劣、恃勲自伐、靡所

表2　唐代の訳経事業と官僚の参与

皇帝	年代	訳主	経典	訳場	訳場役職	官僚	官職	官品	出典
太宗	貞觀3	波羅頗迦羅蜜多羅	寶星陀羅尼經	大興善寺	参助詮定	房玄齡	上柱國尚書左僕射邦國公	從2品	①巻11 ④巻3
					参助詮定	杜正倫	散騎常侍太子詹事	正3品	
					参助詮定	李光恭	礼部尚書趙郡王	正3品	
					総知監護	蕭瑀	右光禄大夫太府卿蘭陵男	從2品	
高宗	顯慶1以降	玄奘	顯慶元年以降に翻訳した経典	大慈恩寺	看閲・潤色	于志寧	左僕射	從2品	①巻12 ② ③第8 ④巻4
					看閲・潤色	來濟	中書令	正3品	
					看閲・潤色	許敬宗	禮部尚書	正3品	
					看閲・潤色	薛元超	黄門侍郎	正4品上	
					看閲・潤色	李義府	中書侍郎	正4品上	
武后	證聖1〜久視1	實叉難陀	大方廣佛華厳經ほか19部	東都大内大遍空寺 三陽宮ほか	監護	賈膺福	太子中舎人	正5品下	①巻13
武后	長安3	義淨	金光明最勝王經ほか20部	東都福先寺 西京西明寺	監護	許觀	成均監(國子監)大学教授	從7品上	①巻13 ⑤巻1
中宗	神龍1	義淨	大孔雀呪王經・佛爲勝光天子説王法經・香王菩薩陀羅尼呪經・一切功德莊厳王經	東都内道場 大福先寺	潤文正字	崔湜	兵部侍郎	正4品下	①巻13 ⑤巻1
					潤文正字	盧粲	給事中	正5品上	
					監護	楊慎交	秘書大監駙馬都尉觀國公	從3品	
中宗	神龍3	義淨	藥師琉璃光七佛本願功德經	大内佛光殿	筆受	中宗	(皇帝)		①巻13・ ⑤巻1
中宗	景龍4	義淨	浴像功德經ほか	大薦福寺	次文潤色	李嶠	修文館大學士特進趙國公	正2品	①巻13 ⑤巻1
					次文潤色	韋嗣立	兵部尚書逍遙公	正3品	
					次文潤色	趙彦昭	中書侍郎	正4品上	
					次文潤色	盧藏用	吏部侍郎	正4品上	
					次文潤色	張説	兵部侍郎	正4品下	
					次文潤色	李乂	中書舎人	正5品上	
					次文潤色	蘇頲	中書舎人	正5品上	
					監譯	韋巨源	左僕射舒國公	從2品	
					監譯	蘇瓌	右僕射許國公	從2品	
					監護	李邕	秘書大監嗣虢王	從3品	
睿宗	景雲2	義淨	稱讃如來功德神呪經ほか12部	大薦福寺	監護	薛崇胤	太常卿衛國公	正3品	①巻13・ ⑤巻1
中宗 睿宗	神龍2〜先天2	菩提流志	大寶積經	内佛光殿 北苑白蓮花亭 大内甘露殿	筆受	中宗	(皇帝)		①巻14
					潤色	徐堅	太子詹事東海郡公	正3品	
					潤色	李傳	邠王	正1品	
					潤色	盧粲	固安伯	正4品上	
					潤色	盧藏用	尚書右承(丞)東海男	正4品下	
					潤色	蘇瑨	中書舎人舒王男	正5品上	
					潤色	彭景直	礼部郎中	從5品下	
					潤色	王晉	左補闕祁県男	從7品上	
					潤色	顔温之	大府丞	從6品上	
					潤色	賀知章	太常博士	從7品上	
					監譯	陸象先	中書侍郎平輿侯	正4品上	
					監譯	魏知古	侍中鉅鹿公	正3品	
					監護	薛崇胤	前太常卿	正3品	
					監護	揚仲嗣	通事舎人弘農男	從6品上	

出典：①『貞元新定釋教目録』②『大唐故三藏玄奘法師行狀』③『大慈恩寺三藏法師傳』④『續高僧傳』⑤『宋高僧傳』

忌憚。

とあって、魚朝恩は陝州に代宗を奉迎してより恩寵を賜うこと著しく、その勲功と神策軍の軍事力を恃みに、朝堂において忌憚するところがなかったという。彼は代宗が「仁王經」の序文に、「開府朝恩、許國以身、歸佛以命」と評す如く、[19] 熱心な仏教信奉者であったから、[20] 既に不空との間に親密なる関係があったとすれば、その何者をも憚らぬ権勢を以って不空の訳経の請願を成就させ、自らそれを指揮するに及んだであろうという推測は成り立たなくもない。

ところで、塚本氏が不空・魚朝恩結託の論拠として挙げているのは、魚朝恩が永泰元年四月に当訳経を統轄し、同年九月に西明寺・資聖寺での百尺高座のため「仁王經」を護送したという事実である。塚本氏はこの事実を両者の関係の所産と見たのか、或は発端と見たのか、説明が無いので解しかねるが、いずれにしても、この事実のみを以って両者の結託を立証しようとするのは、些か強引と言わざるを得ない。管見の限りではあるが、少なくとも永泰元年以前においては、両者の個人的関係を窺わせる事実は見い出し得ない。上述の如く、魚朝恩が訳経の時点で既に仏教を厚く信奉していたことからすると、それ以前において彼が不空と接触していた可能性を否定はできないが、何分憶測の域を出ない。要するに、史料による限り、魚朝恩と不空のつながりは、少なくとも訳経以前においては認め難いということである。

訳経統轄の「使」魚朝恩と「副使」駱奉仙

次に統轄組織の成員個々について訳経との関わりを探ってみたい。統轄組織は正使の魚朝恩、副使の駱奉仙、判官の楊利益、典の馬奉獻によって構成されている。内官の事績は史籍に残りにくいのであるが、幸い使・副の魚朝恩と駱奉仙は列伝他の史料から人物像や足跡を窺うことができるので、彼らを対象に検討してみよう。そこで、先ず両者の経歴を列伝の上からを見てみるに、次頁の表3の如くである。[21]

この略年譜によると、魚朝恩・駱奉仙ともに安史の乱を契機に権勢を伸長させていった如くであり、不空の朝廷接近の足取りと軌跡を一にする点は興味深い。さて、両者の経歴に関して注目されるのは、「仁王經」翻訳の前後において、両者がともに僕固懐恩を巡る一連の事件に関わっているという事実である。この事件とは、朔方節度使郭子儀の下で、安史の乱鎮定のために奮戦した鉄勒部の武将僕固懐恩が、乱が終息するや朝廷と反目し、回紇を誘って謀叛に及んだというものである。そこで、この事件と魚朝恩・駱奉仙との関わりを今少し詳しく見てみよう。参考のため、事件の経緯を年表形式で整理し後に掲げた。[22] なお、この事件の禍機は安史の乱に胚胎するといってよく、従って年表では乱の勃発まで遡って事件を収録した。

この事件は、寶應元年十一月に僕固懐恩が史朝義の降将を専断で安堵したことを、河東節度使辛雲京・澤潞節度使李抱玉が「懐恩貳心あり」として朝廷に上表したことに端を発す。朝廷の懐恩への懐疑は、翌廣德元年七月の辛雲京と懐恩の確執を契機に一挙に深まったが、この一件に深く関わったのが、他ならぬ駱奉仙であった。『資治通鑑』(以下『通鑑』と略す)巻二二三、代宗廣德元年の条に、

秋七月……初僕固懐恩受詔、與回紇可汗相見於太原。河東節度使辛雲京、以可汗乃懐恩壻、恐其合謀襲軍府。閉城自守、亦不犒師。及史朝義既平、詔懐恩送可汗出塞。往來過太原。雲京亦閉城、不與相聞。懐恩怒、具表其狀、不報。懐恩將朔方兵數萬屯汾州。使其子御史大夫瑒將萬人屯榆次。裨將李光逸等屯祈縣。李懐光等屯晉州。張維嶽等屯沁州。……中使駱奉仙至太原。雲京厚結之、爲言懐恩與回紇連謀、反狀已露。奉仙還過懐恩。懐恩與飲於母前。母數讓奉仙曰、汝與吾兒約爲兄弟、今又親雲京、何兩面也。酒酣、懐恩起舞。奉仙贈以纏頭綵。懐恩欲酬之曰、來日端午、當更樂飲一日。奉仙固請行。懐恩匿其馬。奉仙謂左右曰、朝來責我、又匿我馬、將殺我也。夜踰垣而走。懐恩驚、遽以其馬追還之。八月癸

未、奉仙至長安、奏懷恩謀反。懷恩亦具奏其狀、請誅雲京奉仙。上兩無所問、優詔和解之。……九月壬戌、上遣裴遵慶、詣懷恩諭旨、且察其去就。

とあって、前年以来、僕固懷恩の動向に不信を抱く辛雲京が、中使駱奉仙を取り込んで懷恩の謀反を奏上させたことが知られる。八月癸未の条の考異に「實録、癸未、懷恩旋師、次于汾州、逗留不進。監軍使駱奉仙以聞」とあり、下の表3にも見える如く、駱奉仙は懷恩の監軍使としてその軍事行動を監察する任務を帯びていた。征討軍の中核をなす懷恩軍の動向は、軍事行動全体の帰趨を左右するだけに、皇帝の信任厚い駱奉仙が監軍使として派遣されたものであろう。ところで、そもそも監軍使とは節度使にしてみれば、その恣意的行動を制肘される目障りな存在であったわけだが、駱奉仙は特に「恃恩貪甚」というから、僕固懷恩の「不平」が如何ばかりであったかは想像するに難くない。[23]

さて、安史の乱最後の攻防において、神策軍を率い征討軍の殿軍として活躍したのが魚朝恩であった。朝恩は、僕固懷恩が朝廷の懷疑を蒙って河東に駐留していた間、吐蕃の侵攻により陝州に蒙塵した代宗を奉迎し、この功を機に天下觀軍容宣慰處置使を賜って禁軍を統轄するとともに、代宗の依靠を恃んで朝堂おいて権勢を擅にするに至った。ところで、前掲『舊唐書』朝恩伝は、觀軍容宣慰處置使就任の記事の後に、

時郭子儀頻立大功、當代無出其右。朝恩妬其功高、屢行間諜。子儀悉心奉上、殊不介意。肅宗英悟、特察其心。故朝恩之間不行。

表3　魚朝恩・駱奉仙略年譜

皇帝	時代	魚朝恩の事績	駱奉仙の事績
玄宗	天寶14 天寶末	安禄山叛す。 以宦者入内侍省　（舊唐書）	※三原人。歴右驍衛大将軍。數從帝討伐、尤見倖。（時期不明）（唐書）
肅宗	至德1	禄山、洛陽・長安を攻略。玄宗蜀に蒙塵。肅宗、靈武に即位。	
	至德中	常令監軍事。　（舊唐書）	
	同　2	京師平、爲三宮檢責使、以左監門衛将軍、知内侍省事。（唐書）	
	乾元1	九節度討安慶緒於相州、不立統帥、以朝恩爲觀軍容宣慰處置使。……以功累加左監門衛大将軍。（舊唐書）	
	同　2 寶應1	史思明攻洛陽、朝恩以神策兵屯陝。……洛陽平、徙屯汴州加開府儀同三司、封馮翊郡公。（唐書）	
	廣德1	史思明、平州に自決し、安史の乱終焉す。	
	同	西蕃入犯京畿、代宗幸陝。時禁軍不集、徵召離散、比至華陰。朝恩大軍遽至迎奉、六師方振、繇是深加寵異。改爲天下觀軍容宣慰處置使。　（舊唐書）	**監僕固懷恩軍者、奉先(仙)恃恩貪甚。懷恩不平。既而懼其譖、遂叛。**（唐書）
	同　2	**僕固瑒〔僕固懷恩の男〕攻絳州……誘回紇陷河陽、朝恩遣李忠誠討瑒、……敗瑒於萬泉**（唐書）	
	永泰1	不空、「仁王經」翻訳す。	**事（僕固懷恩の叛乱）平、擢奉先(仙)軍容使。掌畿内兵權。……以吐蕃數驚京師、始城鄠。以奉先(仙)爲使。**（唐書）
	永泰中	詔判國子監兼鴻臚禮賓内飛龍閑厩使封鄭國公。　（唐書）	累封江國公、監鳳翔軍。（時期不明）（唐書）
	大曆5	雉經而卒。　（舊唐書）	
	大曆末		卒。（唐書）

表4　安史の乱と僕固懐恩の事蹟

皇帝	年号	西暦	月	事　　件	出典
玄宗		755	11	安禄山（范陽節度使）叛す。	217
			11	高仙之（右金吾大将軍）副元帥拝命、東征。	217
			12	哥舒翰（河西隴右節度）副元帥拝命。	217
			12	**朔方節度郭子儀・左兵馬使李光弼・左武鋒使僕固懐恩、禄山に抵抗。**	217
粛宗	至徳1	756	1	李光弼、河東節度使拝命。	217
			1	安禄山、東京洛陽を攻略、政権樹立（大燕）。	217
			6	哥舒翰、禄山に投降。	218
			6	玄宗蒙塵。楊国忠・楊貴妃被殺。禄山軍、長安に入城。	218
			7	粛宗、靈武に即位。玄宗、成都到着。郭子儀軍、靈武に入る。	218
			8	**粛宗、僕固懐恩を使者とし、回紇に来援を要請。**	218
	至徳2	757	1	安慶緒、禄山を殺害、帝位を簒奪。	219
			9	郭子儀、回紇の援兵を率い、西京を回復。	220
			10	郭子儀・回紇軍、洛陽を回復。安慶緒、河北に奔る。	220
			10	粛宗、西京に入る。	220
			12	史思明、朝廷に降り、范陽節度使を安堵さる。	220
	乾元1	**758**	**9**	**郭子儀・光弼・懐恩、9節度20万の軍を以って安慶緒を鄴を攻む。**	220
			9	魚朝恩、安慶緒招討軍の觀軍容宣慰処置使を拝命。	220
	乾元2	759	3	史思明、安慶緒を応援す。官軍、思明軍と交戦し潰乱。子儀、河陽に撤退。	221
			3	思明、鄴に入り、慶緒を殺す。子儀、東畿・山東・河東諸道元帥權知東京留守。	221
			4	史思明、大燕皇帝を自称。	221
			7	**王思禮、河東節度を兼任。辛雲京、代州節度（現職）。懐恩、朔方節度副使拝命。**	221
			9	史思明軍、洛陽に入る。李光弼、河陽に退き固守。	221
	上元1	760	1	党項、京師に迫る。	221
			閏4	史思明、東京に入る。	221
			9	郭子儀を派遣しての范陽攻略・河北平定案、魚朝恩の反対で実現せず。	221
	上元2	761	1	安史の乱、始めて江淮に及ぶ。	222
			3	史思明、長安侵攻途上、史朝義に殺さる。朝義、皇帝に即位。	222
			4	光弼、河南副元帥・都統河南淮南東西山南荆南江南西浙江東西8道行營節度拝命。	222
			8	李光弼、河南の行營に赴く。	222
代宗	寶應1	762	2	河東節度王思禮薨す。代州刺史辛雲京、河東節度使拝命（牙軍擁立）。	222
			2	郭子儀、知朔方河中北庭澤潞節度行營兼興平定國等軍副元帥を拝命。	222
			4	粛宗崩御。李輔國・程元振、代宗を擁立。	222
			7	子儀、都知朔方河東北庭潞儀澤沁陳鄭等節度行營及興平等軍副元帥を拝命。	222
			10	擁王を元帥に任じ、諸道及び回紇の兵を会し、史朝義を討つ。	222
			10	**朔方節度使僕固懐恩、領諸軍節度行營、擁王の副となる。**	222
			10	**朝義、東に奔る。僕固懐恩等（神策觀軍容使魚朝恩奮戦）東京・河陽を回復。**	222
			11	河北の魏博・易定、官軍に降る。	222
			11	**李抱玉（澤潞）・辛雲京（河東）、懐恩の専断を懐疑し、上表。**	222
			11	子儀、懐恩に副元帥を譲る。懐恩、河北副元帥を拝命。	222
	寶應2	763	1	范陽節度李懐仙、官軍（中使駱奉仙）に降る。朝義、平州温泉柵で自決。	222
			閏1	河北の降將を安堵。	222
			3	李光弼、浙東の反乱を平定。	222

皇帝	年号	西暦	月	事　　件	出典
	廣德 1	763	7	吐蕃侵攻し、河西・隴右の地を取る。	223
			7	**懐恩、太原で辛雲京と確執、河東藩内に朔方の兵を駐屯。**	223
			8	**中使（監軍使）駱奉仙、河東より還り、懐恩の謀反を奏す。**	223
			10	吐蕃、長安に迫る。代宗、陝州に蒙塵。魚朝恩、陝より来迎。代宗、陝に入る。	223
			10	吐蕃、長安に入り、王守禮の孫承宏を皇帝に擁立。	223
			10	郭子儀、商州に在る六軍の潰兵を収め、長安に軍を派す。吐蕃頓去す。	223
			12	代宗、長安に帰還。	223
			12	魚朝恩、天下觀軍容宣慰處置使を拝命し、禁軍を統べ、權寵類無し。	223
			12	駱奉仙、鄠県築城使を拝命し、鄠県・中渭橋の吐蕃防衛軍を率いる。	223
	廣德 2	764	1	**代宗、懐恩を以って憂いとなす（←汾州別駕李寶真、懐恩の異志有るを奏す）。**	223
			1	**懐恩、子の僕固瑒をして太原を攻撃し敗れ、次いで榆次を囲む。**	223
			1	子儀、關内河東副元帥河中節度使を拝命、河東鎮撫に赴く。次いで朔方節度。	223
			2	**僕固瑒、榆次包囲中、部下に攻殺さる。懐恩、麾下300を率い靈武に奔り、入城。**	223
			2	子儀、汾州に至り、懐恩の軍を収める。	223
			6	**懐恩の河北副元帥朔方節度使を解き、入朝を促すも従わず。**	223
			7	**懐恩、回紇・吐蕃10万を引き、涇原に入寇。子儀、奉天に鎮す。**	223
			9	子儀、北道邠寧涇原河西以来通和吐蕃使を拝命。	223
			10	**懐恩、回紇・吐蕃を引き、奉天に迫る。京師戒厳。**	223
			10	河西節度楊志烈、靈武を攻撃。懐恩、靈武に還る。	223
	永泰 1	765	9	**懐恩、回紇・吐蕃・吐谷渾・党項・奴刺数10万を誘い、入寇。**	223
			9	**懐恩、中途にわかに疾し、靈武への帰途、鳴沙にて死す。**	223

と記し、朝恩が郭子儀の功績を妬み、子儀の陥れをはかったことを伝えている。今、その具体的な事例を『通鑑』に徴すに、巻二二一、乾元二年七月の条に、

觀軍容使魚朝恩、悪郭子儀。因其敗、短之於上。秋七月、上召子儀、還京師。以李光弼代爲朔方節度使兵馬元帥。

とあり、乾元二年三月に郭子儀以下九節度より成る安慶緒征討軍が史思明によって潰乱せしめられた事件で、征討軍の觀軍容宣慰処置使であった朝恩が、この敗戦を以って子儀を誹謗し、朔方節度使及び兵馬元帥を解任せしめたことを伝えている。また、巻二二二、上元元年九月の条に、

或上言、天下未平、不宜置郭子儀於散地。乙未、命子儀出鎮邠州。党項遁去。戊申、制子儀統諸道兵、自朔方直取范陽、還定河北、發射生英武等禁軍及朔方鄜坊邠寧涇原諸道蕃漢兵共七萬人、皆受子儀節度。制下。旬日、復爲魚朝恩所沮、事竟不行。

とあり、子儀の兵権を復し、朔方から范陽・河北を攻略せしめる制勅が一旦は下されたが、旬日にして朝恩により阻止されたことを伝えている。更にまた、同巻寶應元年十月の条に、

以雍王适爲天下兵馬元帥。辛酉、辭行。以兼御史中丞薬子昂・魏琚爲左右廂兵馬使、以中書舍人韋少華爲判官、給事中李進爲行軍司馬。會諸道節度使及回紇于陝州、進討史朝義。上欲以郭子儀爲适副。程元振・魚朝恩等沮之而止。

とあり、史朝義征討軍を編成するに当たり、子儀を副元帥に任ぜんとしたところ、程元振・魚朝恩等により阻止されたことが伝えられている。

征討軍の指揮権が郭子儀に委ねられることを、魚朝恩がかくも徹底して阻止したのは、彼が征討軍の監軍たる觀軍容宣慰処置使として、その軍政を牛耳り、戦功の独占を図ろうとしたからに他ならない。つまり、征討軍への独占的な影響力の行使を脅かす存在は徹底して排斥

しようとしたのである。

さて、魚朝恩は陝州迎扈の後、天下觀軍容宣慰處置使を拝命して禁軍の統帥権を掌握したのは前述の如くであるが、この時点で天下兵馬副元帥[24]に任じていたのが朔方節度使僕固懐恩であった。『通鑑』巻二二三、廣德元年八月癸未の条に、

懐恩、自以兵興以來、所在力戰。一門死王事者四十六人、女嫁絶域。説諭回紇、再収兩京。平定河南北、功無與比。而爲人搆陷、憤怨殊深。

とあり、懐恩は大乱の初めより郭子儀の先鋒として力戦する一方、娘婿の登里可汗を説いて回紇の来援を取り付け、寶應元年には天下兵馬副元帥を拝命し、征討軍を領して河北・河南を平定した。安史の乱平定における功績は郭子儀を遙かに凌ぐものがあったと言える。従って、天下觀軍容宣慰處置使として禁軍を総覧する地位にのし上がった魚朝恩自身にしてみれば、天下兵馬副元帥にして軍功右に出るものなく、しかも回紇可汗の舅である僕固懐恩は、国内における甚だ巨大な軍事的対抗勢力であったと言ってよい。『通鑑』巻二二三、廣德二年正月丙午の条に、

遣檢校刑部尚書顔眞卿、宣慰朔方行營。上之在陝也、顔眞卿請奉詔召僕固懐恩、上不許。至是、上命眞卿、説諭懐恩入朝。對曰、陛下在陝、臣往以忠義責之、使之赴難、彼猶有可來之理。今陛下還宮。彼進不成勤王、退不能釋衆。召之、庸肯至乎。且言懐恩反者、獨辛雲京・駱奉仙・李抱玉・魚朝恩四人耳。自餘羣臣、皆言其枉。陛下不若以郭子儀代懐恩、可不戰而服也。

とあって、顔眞卿の上言によれば、朝廷において僕固懐恩の叛状を論じ立てていたのは、辛雲京・駱奉仙・李抱玉及び魚朝恩であったという。魚朝恩が、既に僕固懐恩と隙のある辛雲京・駱奉仙と同調し、懐恩を葬り去ろうとしたのは、上述の彼の思考回路からすれば当然な成行きであった。

かくて廣德二年一月、僕固懐恩は遂いに叛し、息子の僕固瑒をして太原・楡次を攻めしめるが、瑒は部下に殺され、懐恩は手勢三百を率いて靈武に奔走した。次いで同年七月、懐恩は回紇・吐蕃十万を誘い涇原に入寇し、十月には奉天に迫まって、京師を震憾させたが、河西節度使楊志烈の靈武攻撃により、帰還を已むなくされた。そして、翌永泰元年九月、回紇・吐蕃・吐谷渾・党項・奴剌の蕃兵数十万を擁して再び入寇するが、遽に病を発し、靈武への帰還の途中、鳴砂にて没した。

以上、僕固懐恩を巡る一連の事件と魚朝恩・駱奉仙の関係を詳細に検討した。その結果、魚朝恩と駱奉仙は、廣德元年以降、各々の事情から僕固懐恩と強く対立していたことがわかった。

さて、不空が「仁王經」の翻訳を奏請したのは、僕固懐恩が謀叛の挙に出で、一旦は蕃漢の大群を率いて京師に肉薄し、朝廷を震憾させた廣德二年の翌年四月であり、懐恩が靈武に在って入寇の機を窺っていたさ中であった。不空が訳経の奏請[25]の中で「如来妙旨、惠洽生靈。仁王寶義、崇護國家」と讃える如く、「仁王經」が鎮護国家の経典であることを考えれば、不空がこの経典を以って防ごうとした国難が何であったかは言うまでもなかろう。懐恩の脅威になす術のなかった代宗が不空の請願を如何に喜んだかは、新訳「仁王經」に御製の序を賜ったことからも充分窺われる。彼は直ちに不空の請願を容れるとともに、訳経の責任者の人選を行い、使に魚朝恩、副使に駱奉仙を選んだ。それは、先の分析からして、朝堂に在って独り僕固懐恩の非を鳴らしていた両者こそ、この訳経を取り仕切るに最も相応しい人物と、代宗が判断したからに他ならない。或は、既に朝政に大きな影響力を持っていた魚朝恩が、自ら訳経の統轄を申し出たということも考えられなくはない。ともあれ、この僕固懐恩に絡む一連の事件が、魚朝恩・駱奉仙と訳経を結び付ける鍵であったことは間違いは無かろう。

以上、不空の「仁王經」翻訳に関し、これに内官が参与した背景の分析を通して、訳経と当時の政治情勢との関わりを考察した。その結果、当時の時局と訳経事業の責任者魚朝恩・駱奉仙の事績から、この訳経が安史の乱の余燼である僕固懐恩の謀叛を背景に、これを調伏するべく挙行されたものであったことが判明した。

このことはまた、訳経後の朝廷の動向からも充分に窺われる。すなわち、「仁王經」の翻訳は四月の朔より半月を以って終わったが[26]、その年九月、代宗は資聖寺・西明寺に百高座を設け、「仁王經」及びこれと前後して訳された「密厳經」を百法師・百大徳をして講説させた。この折、魚朝恩が六軍を率いて大内から二経を護送したことは先に触れたところである。時に、僕固懐恩が回紇・吐蕃等数十万の蕃兵を誘い入寇してきたが、代宗は二寺の百高座を中止し、西明寺の法師・大徳を資聖寺に集めて転経行道せしめるとともに、資聖寺の良賁等をして「仁王經」・「密厳經」を講ぜしめた。護国宝経の霊験が然らしめたものか、僕固懐恩は侵寇の途上にわかに疾を発し、靈武に没したという[27]。

おわりに

「仁王經」の翻訳は不空の布教活動の上に一つの画期をもたらした。不空は大乱勃発この方、積極的な朝廷工作を展開してきたが、この訳経を行った永泰元年の十一月、代宗より特進鴻臚卿に除せられ、大廣智不空三藏の号を賜った。ここに彼は僧籍に在りながら始めて朝廷の官職を授かったのである[28]。九月に僕固懐恩が急死して間もなくこの授官が行われたことは、代宗が訳経の意義を高く評価したことを示唆する。彼は後に開府儀同三司を拝し、朝廷の品階を極めることになるが、この特進試鴻臚卿の拝命は[29]、不空の布教活動上の新たにして重要な一歩であったといえよう。

註

(1) 「法隆寺蔵『仁王護國般若波羅蜜多經』に関する覚書—その一—」(『別府大学博物館研究報告』十三、一九九一)。

(2) 不空の伝記については、中村裕一「『代宗朝贈司空大弁正広智三蔵和上表制集』解説」(久曽神昇編『不空三藏表制集』〈汲古書院、一九九三〉)に網羅的に紹介されている。なお、当論文は表題の如く「不空三藏表制集」の解説であるが、大興善寺と不空についても詳細に解説している。

(3) 塚本俊孝「中国における密教受容について—傳入期たる善無畏・金剛智・不空の時代—」(『仏教文化研究』二、一九五二)。山崎宏『隋唐仏教史の研究』(法蔵院、一九六七)第十三章 不空三蔵。同『中国仏教・文化史の研究』(法蔵院、一九八一)第十二章 安史の乱と仏教界。この内、塚本論文は善無畏・金剛智・不空の事績を時系列上に跡付けるもので、特に不空の足跡については甚だ詳しい。

(4) 『宋高僧傳』他の伝記によれば、不空は師の金剛智に随って開元八年に入唐するが、その後、師の遺命によりセイロン・インドで修行・求法し、天寶五載(七四六年)に帰朝した。安史の乱勃発時には、河西節度使哥舒翰の要請で彼の地で布教活動を行っていたが、天寶十五載(七五五年)京師に還り大興善寺に入った。至徳元年(七五六年)玄宗が蜀に蒙塵し、肅宗が霊武に即位すると、密かに肅宗に表を奉り起居を尋ね、また肅宗も密使を送り秘密法を求めたという。至徳二年(七五七年)京師が回復され、肅宗が入京するや、不空は直ちに表を上せ帝の帰還を祝賀した。

これ以降、不空は屢々上奏を行い、朝廷に対し積極的な働きかけを行ったが、それらは西明寺沙門円照の撰した『不空三藏表制集』に纒められている。この『表制集』には不空の上表を始め、それに対する皇帝の制書や所轄官庁である祠部からの牒などが収録されている。今、『表制集』に収録されている肅宗朝の文書を挙げてみると、「賀収復西京表」・「賀収復東京表」・「賀上皇還京表」・「謝恩賜杏陳請表」・「請捜検天下梵夾修葺翻譯制書」・「制許捜梵天祠部告牒」・「賀册皇后張氏表」・「制許翻譯經倫祠部告牒」・「進虎魄像并梵書

随求真言状」・「請於興善寺置灌頂道場状」・「智炬寺修功徳制書」の十一件が数えられる。次いで代宗朝に入ると、永泰元年の「仁王經」翻訳の奏請までに四件、大暦九年（七七四年）の不空入寂までに七十一件が確認される。至徳二年から大暦九年までの十七年間に八十二件、年間約五件の朝廷との交渉が行われたわけであり、不空と朝廷との結び付きの深さが知れる。

(5) 註(4)に触れた如く、靈武に即位した粛宗への上表や京師回復直後の上表等はその例である。また、党項が京師に迫り(正月)、史思明が東京を陥した(閏四月)乾元三年の閏四月十四日に宮苑都巡檢禦侮校尉右内率府率員外置同正員賜紫金魚袋内飛龍使史元琮が不空をして大興善寺に灌頂道場を修することを奏請しているが、この史元琮は不空第一の俗弟子であるという(註(3)塚本論文)。更にまた、吐蕃が京師に侵寇し、代宗が陝州に蒙塵した廣德元年十月の翌月十四日(既に吐蕃は京師から撤退)、不空は国の為に灌頂道場を置くことを奏請している。史元琮の言に「度災禦難の法は、秘密大乗に過ぎず、大乗の門は灌頂を最と為す」とあり、灌頂は「度災禦難」の最上の法であるという(『貞元新定釋教目録』巻十五、不空翻経の項)。これらの事実も不空の機を見るに敏な活動をよく伝えている。

(6) 註(3)の諸研究。

(7) 写真は宇佐風土記の丘歴史民俗資料館所蔵のものを、許可を得て転載した。

(8) 『貞元新定釋教目録』所載の記事は、19の経生程華と20の装満蘊文晟を欠くこと、18の校勘の崇福寺沙門超順を義秀としていることを除けば、肩書、姓名ともほぼ訳場列位と同じである。写経には判読不明な文字が幾つかあったが、それらはこの記事によって補った。

(9) 魚朝恩は言うまでもないが、馬奉獻・楊利益はその官職名より内官と知れる。駱奉仙については後に詳しく述べるが、『唐書』に伝があり、その記述内容から内官であることがわかる。

(10) 増谷文雄「中国人の仏教受容」十九 仏教経典の翻訳（『増谷文雄著作集』一東洋思想、〈角川書店〉）。

(11) 『貞元新定釋教目録』、『大唐故三藏玄奘法師行狀』、『大慈恩寺三藏法師傳』、『續高僧傳』、『宋高僧傳』。

(12) 史料中の官僚の官銜で、ほぼ一様に記載されているのは職事官であるので、職事官の品位を基準にした。ただ、表にある如く職事官の記載のないものもあり、その場合は、散官次いで爵位・勲官の順で、その品位を取った。

(13) 訳経に参与した官僚の訳経上の役職を見ると、「参助詮定」、「總知監護」、「看閲・潤色」、「監護」、「潤文正字」、「次文潤色」、「潤色」などと様々であるが、整理すると概ね監護職と潤色（文）職に大別できよう。監護はその名称から判断して、訳経事業の統轄・運営に当たったものと考えられる。潤色（文）は訳主に次ぐ重要な職で、南面して衆僧を掌ったといい、その職務は文章として経典の表現を整えることにあったという(註(10)増谷文献)。かかる監護や潤色の職務内容からして、その様な役職には然るべき地位乃至は学識を備えた人材、或はそれを兼ね備えた人材が求められたはずである。

(14) 『貞元新定釋教目録』第十二、總集群經録上之十二、玄奘翻経の項。同様の内容の話は、前掲の『大唐故三藏玄奘法師行狀』、『大慈恩寺三藏法師傳』にも収録されている。

(15) 『貞元新定釋教目録』第十五の不空翻経の項には「勅於大明宮南桃園翻譯。起自月朔終乎月望。於承明殿灌頂道場、御執舊經對讀新本」とあり、内道場はこの南桃園に設けられていた如くである。また、灌頂道場は内道場とは別で、承明殿に設けられていたことがわかる。

(16) 中村元／笠原一男／金岡秀友 監修・編集『アジア仏教史・中国編Ⅰ 漢民族の仏教』第六章 隋・唐の国家統一と仏教（佼成出版社、一九七五）。

(17) 『元和郡縣志』巻一、関内道一、京兆府の項。

(18) 註(3)の山崎宏氏論文前者。

(19) 代宗は「仁王經」及びこれと相前後して訳された「密嚴經」にそれぞれ御製の序を賜った。両者とも『全唐文』巻四八に収録されている（「新翻護國仁王般若經序」、「密嚴經序」）。

(20) 魚朝恩が仏教に帰依していたことを示す逸話として、『舊唐書』巻一八四の朝恩伝に、

大曆二年、朝恩獻通化門外賜莊爲寺、以資章敬太后冥福。仍請以章敬爲名。復加興造、窮極壯麗。以城中材木不足充費、乃奏壞曲江亭館・華清宮觀樓及百司行廨・將相没官宅、給其用土木之役。僅逾萬億。

とあって、朝恩は章敬太后の冥福を弔う為、通化門外の賜莊を寺院に改築し、寺名に章敬の名を請い賜わったこと、建築資材にこと欠いたため、奏請して曲江・華清池の楼閣を始め、百官の庁舎や没官した高官の家屋を解体し、その資材に充てたことを伝えている。

(21) 魚朝恩は『舊唐書』巻一八四と『唐書』巻一三二に専伝があるが、駱奉仙は専伝をもたず、『唐書』巻一三二の程元振伝に附伝されている。表3は主にこれらの列伝によって作成し、時代背景を示す事実若干を後掲表4より補った。

(22) 表4は『資治通鑑』により作成した。表の右端の出典の欄は、『通鑑』の巻数である。時代背景がわかるよう僕固懐恩関係以外の時局の記事も採録した。なお、僕固懐恩関係の記事はゴチックで表記している。

(23) 表3の駱奉仙の事績を参照。

(24) 前掲『通鑑』巻二二二、寶應元年十月の記事にもある如く、一般的に言って、天下兵馬元帥には皇帝の名代として皇族が任ぜられるが、その役割は征討軍の権威を象徴するに過ぎず、軍の実際上の指揮権は、安史の乱の場合でいうと、郭子儀・李光弼、そしてこの僕固懐恩などの有力武将の任じる兵馬副元帥が掌握していた。

(25) 『不空三藏表制集』巻一、「請再譯仁王經制書一首」。なお、この奏請は『貞元新定釋教目録』巻十五の不空翻経の項にも採録されている。

(26) 訳経後の朝廷の一連の動向については、『貞元新定釋教目録』巻十五・十六の不空翻経の項によった。

(27) 『通鑑』(巻二二三)によると、懐恩は疾を発した後、靈武への帰途、鳴沙県にて没したという。表4を参照のこと。

(28) 『不空三藏表制集』巻一、「拝不空三藏特進試鴻臚卿兼贈号制書一首」。なお、『貞元新定釋教目録』(巻十六)や『宋高僧傳』等の不空の伝記にも見える。

(29) 『不空三藏表制集』巻二、「加開府及封肅國公制一首」。なお、『貞元新定釋教目録』(巻十六)や『宋高僧傳』等の不空の伝記にも見える。

(補註)

唐中期以降、律令官制の機能低下にともない、内廷においても令外の官が生じ、それらはやがて外廷政治にも深く関与していった。例えば、中央の官職で言うと、魚朝恩の任じた觀軍容宣慰處置使や樞密使或は内諸司使などがそれに当たり、觀軍容宣慰處置使は禁軍を統轄し、樞密使は皇帝と外廷を仲介することで国家の機密に与り、内諸司使は唐末に及んで外廷省寺の諸業務を侵奪した。また、地方の官職では駱奉仙の任じた監軍使がそれで、各藩鎮に派遣され、藩帥の軍政を監督した。

そもそも内官は皇帝の家産官僚的存在であり、また彼らの任じたこれら令外の使職の任命権は皇帝に属していたから、政治の表舞台におけるこの様な内官の役割増大は、国政運営における皇帝の影響力の増大を意味するものであった。小論で扱った「仁王經」翻訳をめぐる内官の動向も、唐中期以降のかかる政治の潮流を背景に派生してきた現象として理解すべきであろう。